

## はじめに（生涯学習と地域社会）

今日、生涯学習に関する関心は、行政、民間を問わず高まりつつある。日本の社会教育は、県や各市町村の社会教育課が中心になっておこなってきた公民館、博物館、図書館等の活動が、社会教育活動の柱の一つになってきた。さらに近年になって、生涯学習という考え方を取り入れ、このような活動を行政全体で支えていく体制を整えつつある市町村も少なくない。生涯学習を町づくり運動に展開させていこうという積極的な試みも始まっており、この動きに対して民間の関心も高まっている。

地域社会でおこわれている生涯学習は、教養講座や大学公開講座が定期的に開かれている一方で、現状では趣味的な講座がまだまだ主流を占めている。今日、日常生活のなかで大きなウエイトを占めつつある余暇を生かし、また、老後の残された人生を充実したものにするために、自分の好きな稽古ごとを身につける。そして、同じような趣味をもったものが、趣味をとおして人間関係を深めていくことは、たいへん有意義なことである。それは今日の地域社会における生涯学習の実態として、受けとめていかなければならない問題であろう。

しかしながら、今回の報告で考えていきたいことは、もう少し積極的な、地域社会における生涯学習のあり方である。冒頭に述べた「生涯学習の町づくり」に代表されるように、地域社会の問題を、地域に生活基盤をもっている人々が問題提起し、解決方法を探っていくという生涯学習のあり方が、もう一方で始まっていることに注目してみたい。

放送教育開発センターの主要な事業として、全国の12大学の協力を得て、放送による大学公開講座をおこなっている。そのなかで、琉球大学が沖縄テレビ放送、宮古テレビ、石垣ケーブルテレビの協力で、1989年に放送した第10回琉球大学放送公開講座「地域からの発想」は、地域社会における生涯学習のあり方に、大きな示唆を与えてくれた講座の一つであった。この講座の責任者であった琉球大学教授の池田孝之氏は、テキストのなかで次のような意見を述べている。

「地域を考えていくとそこに強い個性、独自性がある。と同時に地域で取り組んだいろんな努力の結晶、あるいは成果が、他の地域でも役立つことがある。多くの地域で試みた実践が互いの刺激になり、そしてその中からまた共通的な、あるいは普遍的な解決方策、考え方が出てくる可能性がある。いま、私たちが抱えている多くの問題は、地域固有の場で独自の解決方策を行い、それが互いの刺激となって共通解を得る。そんな段階を経ているのではないか。いきなり普遍的、一般的なもの求められるのではなくて、あるいは中央の考え方を地方に押しつけるブレイクダウンの考え方ではなくて、むしろ地方の、市民のレベルから個々の問題を考える。それが集まり、みんなの共通解に向かっていく。あるいは、地方から中央に向かっていく。ボトムアップと言う、下から上っていく裾野の広い考え方、これがまさに地域というものを捉える一番重要な視点である。私たちはそういう地域から発想し、地域の問題が普遍的な広がりをもち全体の問題の解決となる、そしてそれが二十一世紀に向かう、また、新しい私たちの個性の創造であるというように考えていきたい。－後略－」

生涯学習とは言うまでもなく、生涯をとおして何らかの学習活動をとおして、自らを成長さ

せていこうという意志のあらわれである。それは自らが進んでおこなうことが前提にあり、人から強要されるものではなく、人から教育されるものでもない。それ故に、人は学習基盤をいろいろなところにもつことができる。それが一般的な教養であったり、趣味であったりするものであるが、ここではその学習基盤を地域社会におくことはすでに述べた。地域社会のなかには私たちが学ぶべき多くのものがあり、そこに基盤をおくことが生涯学習の方向性を見いだす一つの方法であると考えらるからである。

池田氏が述べているように、地域にはそれぞれ特性があり、個性がある。地域の特性はその地域の生産活動や生活に深くかかわっており、地域の個性をつくりだしている。そのような状況のなかで、地域がかかえている多くの問題は、地域固有の場で独自の解決方策をとっていかざるを得ない。しかしそれが重要なのは、地域という限られた範囲で終わってしまうのではなく、普遍的な一般解につながっていく可能性をもっており、地域からの発想が全体の問題の解決となりえる可能性があるからである。

先の琉球大学の放送講座のなかで興味深いことは、総合科学としての地域社会をとらえていることである。したがって、13回にわたったこの講座では、沖縄の自然、歴史、社会、経済、文化、生活環境、地域医療等の問題をとりあげ、多角的な側面から沖縄社会を分析していることが注目される(1)。

このような作業は、ある意味で地域住民と地域に根ざした大学との共同作業といっている。なかでも人文系の学問は、フィールドワーク（野外調査）が大きなウエイトを占めており、地域の自然環境や地域住民の生きてきた足跡、生活の立て方、ものの考え方などを追っていくことが大きなテーマになる。そのような問題が将来の地域を考えていく上で、貴重な資料になるからである。生活環境、地域医療等についても同様である。

この共同作業は、研究者が研究室や実験室で構築した理論（仮説）を携えて地域に入り、地域の人々から得た知識や現地調査によって、より現実的なものへと練り上げていく。それをまた地域に持ち帰って、地域の人々に報告をする。地域との共同作業による大学公開講座の一つの方法であろう。

地域社会の中で、人を一人前に育てあげることがたいへん重要なことであり、多くの力が費やされた。そこに家族や地域社会のさまざまな知恵と工夫と努力の積み重ねがあった。そして、一人前になった人間が社会の一員に加わり、家族や社会にたいして多様な役割をはたし、やがて若い人を育てる立場にかわっていく。一人の人間が一生の間に、その世代に応じた役割をもっていたのが、日本の伝統的社会であった。そこには教育という観念よりも、むしろ学習という観念が強く働いていた。それは自らが進んでおこなうことが前提にあり、人から強要されるものではなく、人から教育されるものでもない、という意識が貫かれているからである。住民による、本来の意味での自治という考え方が基本にあり、生涯学習と基本的に共通するものをもっていた。

以上述べてきたように、生涯学習それ自体は今日始まったものではなく、日本の社会の中で長い時間をかけて積み重ねてきた基礎があった。それぞれの地域や生活に根ざした学習活動の歴史があり、そのなかにかにしたら豊かな生産力をあげ、家族や社会の一員として、幸せな生活を築き、維持していくことができるか、という人々の願いがこめられていた。ここに研究

者が地域の人々から学ぶべきテーマが存在しているとともに、学問は誰のためにあるのか、という大きな命題が存在している。研究者と地域住民との本当の意味での共同作業は、そこに見出すことができるように思う。

今研究報告の目的は、地域社会における生涯学習の実状を調べ、その形成過程を明らかにしていくことであった。いわば地域における生涯学習の基礎的な調査・研究である。加えて、地域そのものがかかえている問題を、なるべく具体的におさえていくことに力を注いだ。それは先に述べたように、地域社会における問題、また問題解決の過程自体が生涯学習の対象であり、生涯学習社会の形成を追っていく上で、貴重な糸口になると思われるからである。この2つの課題を整理し、体系化していくことは、今後なお活発になるであろう生涯学習の方向性を考えていく上で、意味のある資料になると思われる。

(須藤 護)

#### <参考資料、及び参考文献>

(1) 第10回琉球大学放送公開講座(1989年度)の講義内容は次の通りである。

第1章	地域という視点について—地域の視点と地域づくり	池田孝之
第2章	地域文化と彫刻	丸山 映
第3章	フランス人宣教師のみた19世紀中葉の琉球	森田孟進
第4章	沖縄民俗文化の特性	比嘉政夫
第5章	沖縄の自治と自治体—沖縄から学ぶ地方自治—	仲地 博
第6章	沖縄経済の特性と今後の発展	仲宗根勇
第7章	地域社会をみる眼—沖縄の産業—	鶴飼照喜
第8章	亜熱帯島しょ地域の地形	前門 晃
第9章	共生Symbiosis;サンゴ礁の海の生物達の係わり合い	弥益輝文
第10章	沖縄の水環境と水資源	吉川博恭
第11章	子供の住環境教育	松本京子
第12章	沖縄における生活環境の変遷と住民の健康	平良一彦
第13章	亜熱帯都市の緑化と景観づくり	池田孝之

(琉球大学公開講座10『地域からの発想』琉球大学公開講座委員会・1989)